



勝林寺報

老いの煩惱に生きた

親鸞さま

『歎異鈔』第9条

「お念佛しておりましても、踊りあがるようなどんな喜びも沸いて来ません。また、すこしでも早くお淨土へお参りし往生したいと思う心も起つてこない私は、いつたいどう考へたらよいのでしょうか。」とわたし唯円が、あるときお尋ねしたところ、親鸞さまはつきのようにお話しくださいました。

「そうであつたか。この親鸞もつねなぜだらうかと思つていたのだが、唯円房、あなたもわたしと同じ気持ちだつたんですね。よくよく考へてみると、踊りあがるほど大喜びするはずのことが、正直に喜べないかこそ、私は、ますます往生は間違いないのだと思うのです。当然喜ぶはずのことが抑えられて、現実、喜べないのは、そもそもそれが煩惱の仕業なのです。そんな私たちであるからこそ、阿弥陀さまは始めからご承知になつていて、「煩惱具足（煩惱まみれの）の凡夫どもよ」と仰せられているのですから、如来さまの本願念佛は、このよくな私どものために、大いなる慈悲の心から起つられたのだと気づかされて、今更ながらたのもしく思われるのです。どうでしようか。お淨土へ早く往生したいというところも起つらず、ちよつとでも不具合なことが起きると、たちまち、死ぬのではないかと心細くなるのも「煩惱」の仕業でしょう。果てしない昔から今まで、生まれかわり死にかわり流転輪廻（ろん・りん）してきたこの「苦惱」のふるさとはそく思われるのは、それこそ煩惱の盛んな私だからです。どれほど、名残惜しくとも、この世の縁がつきて、どうすることもできずに、このいのちがおわるとき、そのとき

賢い人ならいざ知らず、悟つた人ならいざ知らず。正直、煩惱具足（ほんのうダラケ）の私の姿を、江戸末期の禪僧仙崖は「老人六歌仙」と称して次のように戯画化して歌つています。

皺がよる、ホクロが出来る。腰曲がる頭は禿げる、毛は白うなる。

手はふるう、足はよろめく。歯は抜ける、

耳は聞こえず目は薄くなる。

身に添うは頭巾・襟巻き・杖・眼鏡。たん

ぼ、温石（オニシタ・礪）・シビン・孫の手。

くどくなる、気短くなる、愚痴になる、心

はひがむ、欲深くなる。

聞きたがる、死にともながる、淋しがる、

出しゃばりたがる、世話を焼きたがる。

又しても同じ話に孫ほめる。達者自慢に人

は嫌がる。

昔、ある老人会の講話でこれを紹介したら「老人を愚弄している」と大変叱られた。が、いま見直すと、これは外でもない、みんなわたくしのこと。それでは、「煩惱具足」とは一体どんなことでしょうか。「具足」とはみんなそろつてている。槍も刀も兜も鎧も脚絆もなにもかも一揃いのグソクを身に纏いと云つた。

佛教では昔から百八煩惱と称して無数の煩惱がわたしにまつわりついていると云つた。代表的な煩惱（六煩惱）「貪慾（ぞよぐ）・瞋恚（じ）。愚痴（ぐち）・驕慢（きょうまん）・疑・惡見（ごい）。」それらの煩惱のその核心をなすもの、すなわち根本煩惱を「無明（むみょう）と渴愛（かゝい）」と昔の教学は指摘している。「無明」（眞実真理が見えない）。しかも「渴愛」（自己中心に執着）する。すなわちすべて自己中心にしか見ない。わたしの得手勝手。そこからしかものが見えない。ここからすべての煩惱は生まれると云うのである。そこから先ず自己を対立的に考える「自他分別（ふんべつ）」。比較・競争し、疑い、他を踏み付けて、自分を高ぶり、選別差別し、などなど……。

永代経法要のこ案内

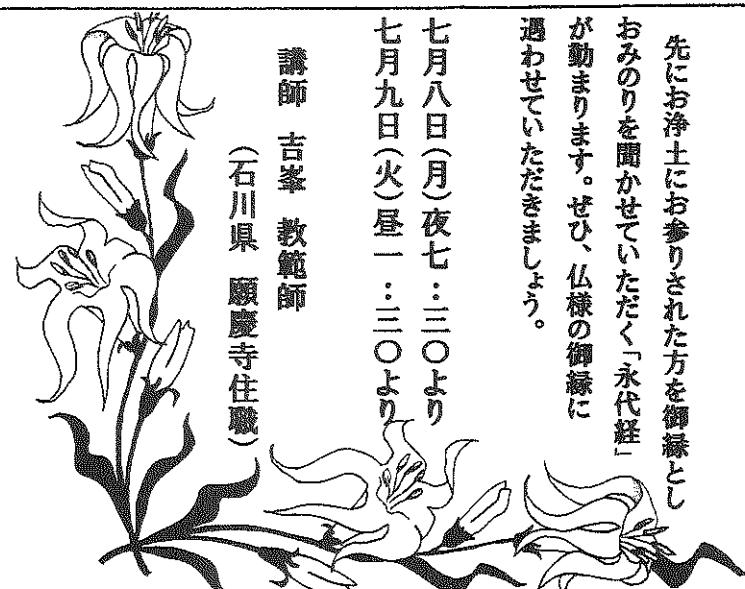
先にお淨土にお参りされた方を御縁とし
おみのりを聞かせていただく「永代経」
が動ります。ぜひ、仏様の御縁に
遇わせていただきましょう。

七月八日（月）夜七：三〇より
七月九日（火）昼一：三〇より

講師 吉峯 教範師

（石川県 願慶寺住職）

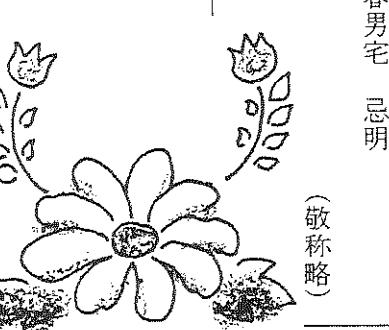
六 日（土）	正福寺 永代経	七 月 勝林寺 予定
七 日（日）	出石組仏壯 報告総会	遠忌法要現地確認会
八 日（火）	勝林寺 永代経	
九 日（水）	初田一三宅 一周忌	
一〇日（木）	出石組 寺族同朋講座	
一一日（金）	みのりを聞く会	
一二日（土）	初田一三宅 一周忌	
一三四日（日）	関岡孝繕宅 七回忌	
一四日（月）	田村春男宅 忽明	
一五日（火）	田村春男宅 忽明	
一六日（水）	田村春男宅 忽明	
一七日（木）	田村春男宅 忽明	
一八日（金）	田村春男宅 忽明	
一九日（土）	田村春男宅 忽明	
二〇日（日）	田村春男宅 忽明	



お札

六月八日（土）

（敬称略）



六月九日（日）

六月二十九日（土）

総代・各地区代議員・仏社理事の皆様には、永代経法要前の清掃奉仕をしていただきました。ありがとうございました。おかげさまで、出石組仏婦会員百余名の皆様を気持ちはならない。この現実に目をつぶってはならない。お釈迦さまは「自灯明・法灯明」よく法事が動められます。

あなた、人事でなく自分の日々。わたしの一生の営みを考えてみよう。そこから逃げてはならない。この現実に目をつぶってはならない。お釈迦さまは「自灯明・法灯明」のみから灯火とせよ、真理を見失うな

自然（じねん）に、お淨土往生させていただきます。早く往生したいとも思われない私を、阿弥陀さまは特別、あわれに思つて下さるのです。このような訳ですからこそ、大いなる慈悲の心で起こされた「本願」はますますたのもしく、往生は間違いないと私は思うのです。

考えてみると、踊り上がるような喜びが湧き起こり、淨土へ早く往生したいというのでしたら、どうでしようか、わたし、煩惱がないのかと、かえって、疑わしくおもわれるのと違うでしようか。」

このように親鸞さまは仰せになりました。

と遺言したという。道元さまは「仏道を習うといは自己を習うなり」といわれた。すなおに深く「わたし」を考えてみようではありませんか。

自然（じねん）に、お淨土往生させていただきます。早く往生したいとも思われない私を、阿弥陀さまは特別、あわれに思つて下さるのです。このような訳ですからこそ、大いなる慈悲の心で起こされた「本願」はますますたのもしく、往生は間違いないと私は思うのです。

考えてみると、踊り上がるような喜びが湧き起こり、淨土へ早く往生したいというのでしたら、どうでしようか、わたし、煩惱がないのかと、かえって、疑わしくおもわれるのと違うでしようか。」

このように親鸞さまは仰せになりました。

仲間たちもいっぽい寄ってきました。

ある浜辺で、亀の赤ちゃんがいっぱい生まされました。そのとき親亀はとっくに浜を離れて遠くの海に行ってしまっていました。亀の子どもたちは母を訪ねてめいめいで大きな海に向かって懸命に泳ぎ出して行きました。

中に一匹、目の見えない子亀がいました。

みんなと一緒に海に泳ぎましたが、どっちへ行ったらいのか分かりません。目の見えない亀はそのうちみんなからも離れて独りぽつになりました。

「おかあちゃん。ぼく、どっちに行ったらいいのかわからんないよ」。不安で泣き出しました。

すると、どこからか声が聞こえました。

「ぼうや。一所懸命泳ぐんだよ。いつかきっと大きなお船がおまえをたすけてくれるから」

そこで田の見えない子亀は、西へ東へ、北へ南へ、泳いでゆきました。何日泳いだでしょうか、何ヵ月泳いだでしょうか。

あるとき亀はなんだか、大きな木に頭をブツけました。そのときどこかから声が響きました。

「がんばるんだよ、お前。そこの穴からお顔を出してごらん。お日さまがかがやいて、おまえのおかあさんもまってるよ」

亀の子は一生懸命、鼻で木の穴を探しました。

「あつた！」

亀の子が、やつと穴を見つけ、穴から頭を突き出すと。そこは広々とした海。お日さまがキラキラ輝いていました。まぶしい眼をしばたき、お空を見上げみまわしたとき、お陽さままでしようか、お母様でしょうか

「もう大丈夫よ。よく頑張ったね。」

海のおひさまとおかあさんはやさしく亀のぼうやを照らしてほめてくださいました。兄弟

親子の出会いの不可思議。人の絆(きずな)の

不思議。ちなみに絆の文字のツクリ「半」は牛を正面から見た絵です。牛の親子をつなぎ止める不思議なひもの糸です。『涅槃經』より法話カレンダー

7月の法話

「まかせよ まかせよ」



如來の聲

私の声

出典 鈴木章子「癌告知のあとで」

北海道斜里町、真宗大谷派西念寺坊守の鈴木章子さんの著書の一部を紹介して味わいます

「私は、四年前乳がんの手術を受け、三年後昨年夏左肺転移ということでお手伝いにも通えなくなってしまった。家でゴロゴロしながら些細な家事をしたり、寺の過去帳の整理をしたり、毎月発行の『勝林寺寺報』の記事をつくったり。それが精一杯。このまま死をむかえるには。いくぶんかの不満がある。

『ラジオ深夜便』5月号に、ある心理学の先生がギャグめいた云い方で老いを生きる要諦(あだい)を教えてくださっている。

「歳をとつたらキヨウヨウとキヨウイクが大切」

「今日はどんな用があるか」

「今日行くところは」

朝、目が覚めたら、サテ今日私に出来る用事)仕事を探し、その段取りを考え始動する。

それから不自由でつらくても(今日行くところへ)狙いを定めて体を動かす訓練をする。痛いといってへたまるな。一日怠ればその時点から終生動けなくなる。

これはいい教え。老いを生き抜く要諦(ようび)の中に導く身にさせていただけますことたい)です。

老いを生き抜く要諦

どん

今年も勝林寺恒例の納骨研修旅行が行われました。案じた猛暑や雨に合う」となく、とてもよい旅をさせていただきました。

この旅は、年齢は、二十代から八十多代と幅広く、男性と女性の比率は三対二くらい、住まいは、但東町、出石町、八鹿町などまちまち、ただ一つ、勝林寺の有縁の方という一点のみでつながっている皆さんに参加してもらいました。だから、出発当初のバスの中は、少しがちない感じがするのですが、ある時を境に、打ち解けて、お互にほどよい距離感を保ちながら和やかに一日間を過ごして、帰る前には、皆さん

我が家が今年の秋時分からどうも体の調子がよくない。足腰が不具合で日ごろ楽しんできたウォーキングは勿論、心的障害者療育施設「ワーカホーム大地」での作業手伝いも、養護老人施設「いずし荘」デーサービスセンターでのお手伝いにも通えなくなってしまった。家でゴロゴロしながら些細な家事をしたり、寺の過去帳の整理をしたり、毎月発行の『勝林寺寺報』の記事をつくったり。それが精一杯。このまま死をむかえるには。いくぶんかの不満がある。

『ラジオ深夜便』5月号に、ある心理学の先生がギャグめいた云い方で老いを生きる要諦(あだい)を教えてくださっている。

「歳をとつたらキヨウヨウとキヨウイクが大切」

「ある時」とは、昨年春から今年の春に亡くなられた方の納骨の時です。大谷本廟の十階にある「勝林寺」と書かれた御廟の前に立ち、まず、先にお浄土に行かれた皆さんに「今年も来ましたよ」と挨拶します。そして「新しいお仲間をよろしくお願ひします」と納骨させていただきます。最後には「私もいざれ仲間に入れていただきます。その時はよろしく」というお願いも欠かしません。「私の命が終わつた後も、こうやって皆でお参りしてもらえるのだな」と安心して御廟を後にします。たぶん、旅に参加されたすべての方がこのような心持になられるのでしょう。この安心感・一体感は、他では味わったことのないものです。

納骨を終えられたあとバスの中は、ほつとした空気が漂い、笑顔が増え、皆さんの距離がぐつともちぢまつているのがわかります。それは、何も坊守からの「納骨までは、お酒は禁止!」の命が解かれるせいだけではないような気がします。(笑)